朝子供が學校に來ると、外套を脱ぎ、出來る丈自分で之を釘にかける。衞生局員が毎日出張して居て、室に入つてくる子供を見る。此檢視なければ子供は遊戯室に入れない事になつて居る。若し風邪を引てゝたり、熱があつたりすると家庭に歸す。但し一寸とした病氣で學校で處置が出來るものならば、看護婦が之に手當をしてやる、

遊戯室に入ると子供は自分で棚や引出のある所へ行て好きな玩具を出して遊ぶ。此處では彼等の特質や特殊の能力や弱點を赤裸々に表はすので教師はそれを記錄して參考資料とする。一時間許りの遊戯がすぎると、少し果物を與へる。大抵は蜜柑の汁を飲ませる。それから戸外遊戯に移る。或者は砂いぢりをし、或者はブランコをし或者は輪をまわし、或者は車を引いて遊ぶといつた樣に種々のことをして、今度は晝食になる。晝食の少し前に圓形を作つて椅子に腰かけ、お噺や音樂を聞かせる。晝食は榮養專門家に依て獻立られたものを用ゆる。若し食物に對する好嫌があれば、それを充分に調査して、不合理な嫌ひに打勝つ樣に誘導して行く。

アイオア大學のボールドウィンが米國兒童の發育の標準を設定して居るが、それと此學校の子供を比較すると非常に發育してゐる。それは主として榮養に注意した晝食と間食とを與へる結果である事は勿論である。

しかし學校だけの努力は家庭に於ける朝夕二回の食事で毀される虞れがある。それで毎週二回に母の會合を開き、各回に七人位の母親を招いて榮養食料の相談やら討論をする事になつて居る。晝食がすむと二階へ行て晝眠を行ふ。子供には各自專用の外衣と毛布とを用意してある。窗は開かれ子供は暖い樣に被をかけられる。三時までは靜肅にする事を要求される大多數は熟睡し、すつかり元氣を恢復して目を醒まし、迎に來た親に挨拶をする用意をする。以上はパーマー、スクールの一日の仕事の大要であるが、同校には貧困の家庭からも、富裕の家庭からも、又知識階級の家庭からも亦無智の家庭からも子供が來て、身心共に種々の物質と遺傳とを有してゐるといふ事である。

（「幼兒の研究」第一卷第六〇號久保良英氏「幼兒生活の側面觀」より）

たゞ一人群におくれた子烏を
ねぐらに迄夕づゝの影　（K子）